# ～俺のバイトは、お化け屋敷～

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～俺のバイトは、お化け屋敷～

【Ｎコード】
Ｎ４１５１ＢＡ

【作者名】
零堵

【あらすじ】
俺のバイトは、お化け屋敷で働いている。
そこで出会ったのは、家が隣同士のバイト仲間や
後輩のスタッフ、酒癖が悪いチーフがいたりしていたのであった。
家に帰ると、ブラコンな妹がいたりしている。
そんな俺の、ふつ～のようなふつうじゃないような・・・日常だったのであった・・・

## ～プロローグ～

「キャー！！！」

「大丈夫だ、俺がついてるぜ？」

「うん、武、かっこいいわ～」

そんな声が聞こえる。
うん・・・やってらんないぜ！って感じなのだが・・・
あ、ちなみに今、いる場所は、何所にでもあるありふれた遊園地
「ドーリーランド」と呼ばれるテーマパークの中にある。
お化け屋敷、名前が「デット・スクール」と呼ばれている。
学校をイメージしたお化け屋敷で、建物も結構広く取っていた。
俺は、そこにやって来る客に対して、脅かし役をやっているのである。
今も特殊メイクを施して、かなり怖い顔になっている。
俺は、理科室担当で、理科室にやってきた客を、顔を見せて脅かすと言う役をやってるのであった。
今もカップルで来た客に対して、うおおお！！と叫んで、驚かしたのである。

「なあ？俺がいるから大丈夫だぞ？」

「うん、本当にかっこいいよ？武～」

うぜ～！！早くいなくなれと内心思いながら、驚かした。
バカップルがいなくなって、次の客を待っていると

「お疲れ様、京太郎」

理科室にやって来たのは、俺と同じスタッフで、保険室担当の峰霧（みねぎり）華（りか）と言う。
年は俺と同じ二十歳で、もう一年ぐらいこの「デット・スクール」でバイトとして、働いているのであった。
ちなみに霧華の恰好は、血まみれの服を着て、手にナイフ（レプリカ）を持っている、自殺した少女bの役を演じているのであった。

「ああ、霧華か・・・」

「どうしたの？京太郎、あ、もしかしてさっきの客？」

「ああ、まあ・・・お化け屋敷だからカップルが盛り上がるのは、解るが・・・人前であんなにいちゃいちゃするのは、なんかむかつくって感じだな」

「まあ、そうよね～、お互い独り身は辛いわよね」

「あ、何だったら俺と付き合う？」

「冗談言わないで、私は年上が好きなの、あ、じゃあ私の休憩時間そろそろ終わるから、行くわね？じゃね、京太郎」

「ああ、りょ～かい」

そう言って、霧華はいなくなった。
さて、俺も次の客が来るまで待機するか・・・と思い、指定の場所で待つ事にした。
数分後、次の客がやって来る。

「こ、ここに誰もいないよね？」

「いないと思うよ？ただの理科室だって」

今度は、小学生ぐらいと思われる餓鬼二人だった。
いないと思ってるみたいだから、ここで驚かせばびっくりするな・・・と思い、驚かす。

「ぐおおおおお！」

「きゃあああ！」

「ば、化け物！悪霊退散、色即是空、南無阿弥陀仏！！」

俺は、幽霊か！？っと突っ込みたくなったが、一応客なので、黙ってる事にした。
ちなみに餓鬼は、俺に向かって、お札？らしき物を投げつけてきた。

「こ、これで足止めできるはず！今のうちに逃げよう！」

「うん！」

そう言って、餓鬼二人がいなくなる。
・・・・足止めってな・・・俺は、この場所から離れる事は出来ないし
こんなチンケなお札でどうこう出来る筈ないんだけどな・・・
俺は、地面に落ちているお札をゴミなので、くしゃくしゃに丸めてポケットの中に入れる。

汚すと、俺がこの理科室を掃除する羽目になるしな・・・
そう思っていると、

「京太郎さん、今日の客はこれで最後です」

そう言って来たのは、このドーリーランドの制服を着ていて、このデッド・スクールのスタッフでもある。
横村大輝（よこむらたいき）だった。
年は、俺の一つ下で、十九歳である。

「大輝、と言う事は、もう客が来ないから、今日のバイトは終わりにしていいのか？」

「はい、時間ももう夜ですし、チーフがあがっていいぞ？って言ってましたから、保健室にいる霧華さんにも言って来ますね？」

そう言って、大輝は理科室から出ていく。
そうか・・・終わりか・・・バイトをしている間、真っ暗な部屋でず～っと待機しているので、時間の感覚がまるで解らないので、大輝に来て貰わないと
終わりって解らないのであった。
俺は、とりあえず顔のメイクを落とすべく、スタッフ専用控室に向かう。
そこで、顔のメイクを落とすのに三十分かかって、元の顔に戻った。
着てる服装も着替えて、私服を着て、外に出る前に、チーフの所に向かった。
チーフがいる部屋の前にたどり着いて、ノックする。

「森谷京太郎です、チーフ入ります」

「ああ、鍵はかけてないから入って来るがいい」

「了解しました」

そう言って、中に入る。
中にいたのは、二十代ぐらいの黒髪の美人さんで
このドーリーランドのチーフの前田亜美(まえだあみ)だった。
年は二十五で、男っぽい口調でいつも話している。

「京太郎、今日の客層はどうだった？」

「はい、小学生とカップルが多かったです」

「そうか・・・・ふむ・・・、もっとお客を増やすためにも、京太郎、はりきって怖がらせるのだぞ」

「は、はあ・・・解りましたよ」

「うむ、よし、今日はもうあがっていいぞ？そうだな・・・もし暇だったら、私と飲みに行くか？」

「い、いえ、遠慮しときます！では！」

俺は、そう言ってその場から離れる。
なぜ離れたのかと言うと、前に一緒に飲みに行った時
「京太郎、私の物になれ、というか結婚しろ」と言って、襲ってきたからであった。
確かに亜美チーフは美人だけど・・・無理矢理はよくないと思ったので、逃げたのである。
しかもそれを言った次の日に、完璧に忘れていたので、酔った勢い

で襲われるのはたまったもんじゃなかったからであった。
俺は、そう思いながら、園内の外に出る。
外に出ると

「お、京太郎？今、帰り？」

「ああ、そうなるな」

そう言ってきたのは、さっき会った霧華だった。
霧華は、黒髪のショートでさっき着ていた血まみれの衣装では無く
普通の女が着るような、涼しげな恰好をしていた。

「じゃあ、一緒に帰ろう？家、隣同士だしさ？」

「そうだな」

霧華の言った通り、俺と霧華はマンションの隣同士なのであった。
初めてこのバイトをした時に偶然知って、本当に驚いたな・・・
俺と霧華の二人で、街の中を歩いていく。
マンションは、遊園地からそれほど遠く無く、十分ぐらいでたどり
着いた。
一緒にエレベーターに乗って、同じ階にたどり着く。
俺が、３０１号室で、霧華が３０２号室だった。
部屋の前に着て、霧華がこう言ってきた。

「じゃあ、京太郎？明日も、がんばりましょう？」

「ああ、そうだな、明日もやるか・・・」

そう言って、部屋の中に入る。
普通、自分の家に帰ったら、落ち着く事が出来るのだが・・・
俺の場合は、全く落ち着かなかった。

「お帰り～！ご飯にする？お風呂にする？それとも・・わ・た・し？」

「馬鹿言うな・・・京子」

「え～、ここは普通に私って言うべきでしょ？兄さん、私、兄さんが望むなら、近親相姦バッチこ～いって感じだしさ？」

「何が普通だ・・・」

そう言ってるのは、俺の妹の、森谷京子だった。
京子は十八歳で、黙っていれば普通に可愛いのに
重度のブラコンなので、俺としてはかなり困っているのである。

「ところで、兄さん？」

「何だ？」

「彼女作ってないよね？と言うか、兄さんの彼女になるのは私ときまってるから、もし出来たら、私が速攻で別れさせてあげるけどね？」

「おい・・・それ・・・本気で言ってるのか？」

「もちろん本気よ」

「はあ・・・もういい、なんか疲れたから、もう寝る」
「あ、じゃあ、私が一緒に寝よう？それで私の事、襲ってもいいよ？」
「誰が襲うか！、俺は一人で寝るから入って来るな！」
「あ、兄さん！」
そう言って、俺は、自分の部屋に閉じこもる。
しっかりと施錠して、妹が入ってこれないようにした。

「兄さん、開けてよ～私も一緒に寝る～！」
そうドンドンと、扉をたたく音が聞こえる。
あ～もう、五月蠅い！一向にやめる気配がないので、しぶしぶ開く事にした。
「扉をたたくな、近所迷惑だろ！」
「だって・・・兄さんが、鍵を閉めるから・・・」
「はあ・・・一緒に寝てやる、それでいいだろ？ただし、襲わないからな」
「それでいいよ、私、兄さんとくっついて寝たかったし」
そう笑顔で言っている。
うん・・・なんで、こんな風になっちゃったんだ？マイシスターよ・

・・

俺は、そう思いながら、明日も仕事があるので、寝る事にしたので

あった・・・

## ～プロローグ～（後書き）

零堵です。
おためしとして書いてみました。
気が向いたら、この物語も連載していこうと思います。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4151ba/

～俺のバイトは、お化け屋敷～

2012年1月10日23時50分発行